

「クジラ構文」はなぜ英語話者にとって自然に響くのか

平沢 慎也

1. イントロダクション

本稿は、日本語を母語とする英語学習者が習得に苦戦する「クジラ構文」(e.g., *A whale is no more a fish than a horse (is).*) がなぜ英語話者にとっては自然な表現と感じられるのかについて論じたものである。具体的な議論に入る前に、そもそも「ある言語の話者にとってある表現が自然な表現と感じられる」とはどういうことなのかという問題について、本稿の立場を明確にしておきたい。

この点について筆者は Taylor (2004) の議論を踏襲する。彼は、「ある言語 L においてある言語表現 E がしっくり来る自然な表現と感じられるのは、E と似ていると感じられる他の表現 E', E'', E''', … がその言語体系の中に存在し、それらが共謀して E に ecological niche を与えているからである」という考え方を提唱した。ここでは、彼の挙げている例の中から hamburger という単語を取り上げることにする。元々この単語は、London から Londoner が生まれたのと同じようにして、地名の Hamburg に接尾辞の -er がつくことによって生まれたものである。しかし、ある時点から少しずつ、元々の hamburger という区切り方ではなく ham/burger という新しい区切り方に基づいて認識されるようになり、その結果 cheeseburger や burger といった新しい単語が生じた。一体どうして、ham/burger という新しい区切り方が自然な区切り方として認められるようになったのだろうか。

「ham が肉の ham のように感じられるから」では理由にならない。確かにハムはハンバーガーの具と同じように肉の一種であるが、ハンバーガーの中に入っているものはハムではないし、仮に単なる「肉」という緩やかな意味的繋がりだけで ham/burger という切り方が生じるのだとしたら、meat を m/eat とする区切り方や hear を h/ear とする区切り方も生まれるはずである。meat は eat する対象であり、hear は ear を使って達成される知覚を表すからである。しかしこのような区切り方は自然でない、英語らしくないと感じられる。

Taylor (2004) によれば、ham/burger という新しい区切り方が生じたのは、hamburger という単語の音節構造とストレスパターンが dog-lover や man-hater、horse-breeding など多くの慣習化した単語と完全に一致しており、かつこれらの単語は第一音節と第二音節の間に意味的な境界を持つためである。言わば、こうした数々の単語が共謀して ham-burger という

区切り方に *ecological niche* を与えているのである。一方で、*m/eat* や *h/ear* といった区切り方が不自然に感じられるのは慣習化した類似表現が他に存在しないためであると考えられる。

この発想に基づき本稿は「クジラ構文」に *ecological niche* を与えるべく共謀している英語表現としてどのようなものが考えられるかを論じる。そのためにまずは「クジラ構文」の意味を正確に記述することが必要となる。これが次節の目的である。

2. クジラ構文は何を意味するのか

2.1. 従来 of 分析の問題点

no more ... than という形を取る構文のうち、「後行節で表される命題（以下、「後行命題」）が偽であるのと同様に、先行節で表される命題（以下、「先行命題」）も偽である」という意味を表すものは、日本の学校文法では例文(1)の内容から「クジラ構文」や「鯨の構文」などと呼ばれてきた¹。

- (1) A whale is **no more** a fish **than** a horse (is).

馬が魚でないのと同様にクジラも魚でない。

- (2) I would **no more** think of hitting a student **than** I would a policeman.

(Quirk et al. 1985: 1136)

私は、警察官を殴ろうなどと思ひもしないのと同じように、学生を殴ろうなどとは思わない。

- (3) [...] thinking in very bliss that the world, so seen, is infinite; had no boundaries, **no more** of space **than** of time.

(Joyce Carol Oates, *Labyrinth*)

至福の気分で、こうして見る世界は無敵だと思った。空間にも時間にも、果てというものが無い。

(2011 年度金曜 1 限『翻訳演習』教師訳例)

先行研究の多くは「後行命題が偽であるのと同様に、先行命題も偽である」が「クジラ構文」の意味であると考えており、次のような例があり得ることはほとんど指摘されてこなかった。次の例は全て「クジラ構文」が「先行命題が真であるのと同様に、後行命題も真である」という意味で用いられているものである。

- (4) Irradiating yourself in the hope of feeling better was **no nuttier than**, say, drinking a few

teaspoons of plain water as medicine, which is called homeopathy and is extremely popular today.

(Theodore Gray, *For That Healthy Glow, Drink Radiation!*)

具合が良くなるはずと思って放射能に身をさらしていたことは確かに間違いじみているが、たとえば薬として小さじ数杯分の何の変哲もない水を飲むことだって（こちらは今日ではホメオパシーと呼ばれ極めて普通に行われているけれども）同じくらい間違いじみているではないか。

- (5) What I did is **no worse than** what you and your father had planned for me.

(*Columbo*, Episode 54, *Uneasy Lies the Crown*)

僕がしたことと同じくらい酷いことを、君と君のパパも企んでいたじゃないか。

- (6) Nuclear weapons are **no more** a threat to the world **than** an epidemic of bacteria spreading.
核兵器に負けず細菌の拡散も世界にとって脅威となる。

これらの例は、形からすれば完全に「クジラ構文」であるが、意味は「後行命題が偽であるのと同様に、先行命題も偽である」ではなく、「先行命題が真であるのと同様に、後行命題も真である」である。以下、具体的に見ていく。

(4)は放射性物質が身体に良いものとして販売され人気を博していた時代があったことを受けてのもので、「過去の放射性物質ブームは狂ったものであったが、現在のホメオパシーも狂ったものである」と解釈するのが妥当である。実際、(4)の引用箇所よりも後に次のような部分がある。特に下線部に注目されたい。

- (7) So don't for a minute think that we're all smarter and more modern than those idiots eating radium 100 years ago: Homeopathy is a huge industry today, and it is every bit as nutty.

(T. Gray, *For That Healthy Glow, Drink Radiation!*)

「100年前の人々が狂っていたのと同じくらい今の人間も狂っている」と明言されている。これにより(4)の解釈が正しかったことが保証される。

(5)はテレビドラマ『刑事コロンボ』から採った例文である。この文の発話者 Wesley は、妻 Lydia とその父親の企みによって、Lydia と離婚させられそうになっていた。その腹いせに、Lydia に愛人がいることを知っていた Wesley は、Lydia の愛人を殺害した。後に、Wesley が犯人であることが Columbo によって証明され、Lydia は Wesley に軽蔑の眼差しを送る。そこで Wesley が放つセリフが(5)である。自分のした殺人行為と同じくらい酷いこと（強制的に離婚を成立させること）を君たちだって企んでいたではないか、と責めているのである。

(6)はインフォーマント（20代後半・女性・アメリカ英語話者）による作例である。く

れぐれも、「細菌の拡散が恐ろしくないのと同様に核兵器も恐ろしくない」などという非常識な内容のセンテンスではない。核兵器も恐ろしいし、細菌の拡散も恐ろしいのである。

このように、「クジラ構文」が「先行命題が真であるのと同様に、後行命題も真である」という意味を表し得ることは疑いようのない事実であり、従来の研究にとって大きな問題となる。

2.2. 本稿の分析

では、この事実をどのように捉えたらよいのだろうか。本稿の主張は次の通りである。以下の小節ではこの主張の妥当性を検証する。

- (8) 「クジラ構文 (no more ... than)」の意味は、「後行命題が真である蓋然性よりも先行命題が真である蓋然性の方が高いだろう」という聞き手の想定を否定し、その二つの蓋然性の間に差はない（つまり同程度である）と述べることにある。

2.2.1. 「差分スロット」という考え方

(8)を検証するための準備段階として、「差分スロット」という概念を導入したい。比較級の直前に数量を表す語句が置かれ、比較されている二者のレベルの差分が表されることがある。本稿では、比較級の直前に、差分を表すフレーズが入るための「差分スロット」がある、という言い方をすることにする。たとえば(9)では差分スロットを埋めている *six years* という名詞句が年齢差を表しているのである。

- (9) He was six years **older** than I was, and I regarded him with reverence.

(Ethan Canin, *Blue River*)

ロレンスは僕より六つ年上だった。僕は彼を崇めていた。

(柴田元幸『生半可版 英米小説演習』)

比較級の直前に差分スロットがあると考えることによって、「はるかに [少しだけ] 多く」の意味で *much [a little] more* と *many [a few] more* が使い分けられるメカニズムも説明できる。以下の例を見よう。

- (10) It was pushing five, and although Grace had said she would be back by six or six-thirty, I wanted to squeeze in a little more time with the blue notebook before she returned, to keep

on going until the last possible minute. (Paul Auster, *Oracle Night*)

もうじき五時で、グレースは六時か六時半に帰ってくると言っていたが、その前に青いノート相手にもう少し進みたかった。ぎりぎりまで続けていようと思った。

(柴田元幸 (訳) 『オラクル・ナイト』)

- (11) I was almost sixty years old, and I didn't know how much time I had left. Maybe another twenty years; maybe just a few more months. (Paul Auster, *The Brooklyn Follies*)

目下六十歳近くで、どれだけの時間が残されているかもわからない。あと二十年あるのかもしれないし、あと数ヶ月かもしれない。

(柴田元幸 (訳) 『ブルックリン・フォリーズ』)

(10)では time が不可算名詞であり、不可算物の差分は不可算物であるから、差分スロットを埋める名詞句は a little となる。一方、(11)では months が可算名詞であり、可算物の差分は可算物であるから、差分スロットを埋める名詞句は a few となるのである。

more が形容詞ないし副詞を修飾して〈量〉ではなく〈程度〉を表す場合 (e.g. more beautifully, more strict) には、〈程度〉という概念の抽象性から、many 型ではなく much 型が選ばれる。

- (12) Because comics were perceived as only for children, even though that wasn't true, the code of what was possible was that much more strict. (Art Spiegelman)

コミックスはもっぱら子供向けと見られたから—それだって嘘なんだが—規約はそのぶんずっと厳しくなった。

(柴田元幸 (編・訳) 『ナイン・インタビューズ 柴田元幸と9人の作家たち』)

では、差分がゼロになった場合にはどうなるのだろうか。このときには数量詞の no を用いることができる。たとえば「たったの…」という意味で no more than ... というイディオムを使うことができるが、これは差分スロットが数量詞の no 「ゼロ」で埋められたものと考えられる²。

- (13) Picking the lock on the front door is child's play for Blue, no more than a matter of seconds [...]. (Paul Auster, *Ghosts*)

入口の鍵を開けることくらいブルーにとっては朝飯前、ほんの数秒の仕事である。

(柴田元幸 (訳) 『幽霊たち』)

(13)では所要時間が a matter of seconds を越えている差分がゼロ(つまり所要時間と a matter

of seconds がイコール)なので、結局かかった時間は a matter of seconds ということになる。

2.2.2. 想定の覆し

このように no more than X の no が「差分がゼロ」を意味するものであるとすると、no less than X との意味の違いが問題になる。どちらも結局数値としては「X である」ということを述べていることになるのに、no more than X が「たったの X」の意味になり、no less than X が「X も」の意味になるのはどうしてなのか。

答えは、想定を覆しにある。no more than X は、聞き手が抱いている「more than X だ」という想定を覆し、「X を超えている差分はゼロだ」と言っているのである。だから、X という数値が想定以上に小さいということが際立ち、「たったの X」という意味が生じる。逆に、no less than X は、聞き手が抱いている「less than X だ」という想定を覆し、「X を下回っている差分はゼロだ」と言っているのである。だから、X という数値が想定以上に大きいということが際立ち、「X も」という意味が生じる。

(14) The answer sheet was so small that I was able to write **no more** than 30 words.

(15) The guide contains details of **no less** than 115 hiking routes. (OALD 第 8 版)

(14)では、「答案用紙は普通 30 words より多く書けるものだ」という想定が覆され、実際書けたのは 30 words だったということが述べられているので、「たったの 30 語」というニュアンスになる。一方(15)では、ガイドブックに載っているハイキングコースは 115 未満であるという想定が覆され、実際に 115 コース載っていたということが述べられるので、「115 も」というニュアンスになる。

この分析は than に続く名詞句が数量でない場合にも同様に当てはまる。下の(16)では「一般市民である女性がパークスロープの女君主と言えるほどのものではないだろう」という常識的な想定が覆されている。

(16) I look at everyone, and if I had seen this woman before (who was **no less than** the reigning monarch of Park Slope), I would have remembered her. (Paul Auster, *The Brooklyn Follies*)
私はすべての人をじっくり見る^{たち}だし、この女性を、ほかならぬパークスロープの女君主を前に見ていたら、きっと覚えていたと思う。

(柴田元幸 (訳) 『ブルックリン・フォリーズ』)

2.2.3. 「後行命題が偽であるのと同様に先行命題も偽である」タイプを捉え直す

従来「クジラ構文」の典型例として扱われてきた例文(1) (i.e., *A whale is no more a fish than a horse (is).*) を、第 2.2.1 節と第 2.2.2 節で準備した概念を利用して、捉え直してみよう。

(1)において比較されている命題は、先行命題「クジラは魚である」と後行命題「馬は魚である」である。これらの命題が真である蓋然性が比較されているのである。第 2.2.1 節と第 2.2.2 節の内容を踏まえれば、(1)自体が伝達している意味は次のようなものと考えられる。

(17) (1)がそれ自体として伝達している意味：クジラが魚である蓋然性は、馬が魚である蓋然性よりも上であると思っているかもしれないが、それは誤りであり、前者が後者を上回っている差分はゼロである。

ところが実際に伝達される意味は「馬が魚でないのと同様にクジラも魚ではない」というものであり、(17)とは違って見える。これはどうしたわけであろうか。

答えは百科事典的知識にある³。つまり、「馬が魚である蓋然性はゼロである」ということが、「クジラは魚であるかどうか」よりも確固たる百科事典的知識として共有されているために、前提として(17)に加えられて解釈されるのである。

(18) (1)の解釈のために活性化される百科事典的知識：馬が魚である蓋然性は 0% である。

(17)に(18)が加えられると、次の意味が伝達されることになる。

(19) (1)の最終的な意味：クジラが魚である蓋然性は、馬が魚である蓋然性 (=0%) よりも上であると思っているかもしれないが、それは誤りであり、前者が後者を上回っている差分はゼロである。

これはつまり「クジラが魚である蓋然性は 0%」ということである⁴。

このように、後行命題が偽であることが前提となり、先行命題も偽であることが新たに導き出され焦点となっている。このため「馬が魚でないのと同様にクジラも魚でない」という日本語訳は適切だということになる⁵。

以上、「差分スロット」・「想定覆し」・「百科事典的知識」という三点を踏まえて「後行命題が偽であるのと同様に先行命題も偽である」タイプの「クジラ構文」について分析

した。次節では同様の分析を「先行命題が真であるのと同様に後行命題が真である」タイプに適用してみよう。

2.2.4. 「先行命題が真であるのと同様に後行命題も真である」タイプを説明する

ここでは、「先行命題が真であるのと同様に後行命題も真である」タイプの例として、『刑事コロンボ』から採った例文(5) (i.e., *What I did is no worse than what you and your father had planned for me.*) を分析する。

(5)において比較されている命題は「私のした殺人行為は悪いことである」と「君たちの企んだ離婚計画行為は悪いことである」の二つである。これらの命題が真である蓋然性が比較されているのである。第 2.2.1 節と第 2.2.2 節の内容を踏まえれば、(5)自体が伝達している意味は次のようなものと考えられる。

(20) (5)がそれ自体として伝達している意味：私のした殺人行為が悪いことである蓋然性は、君たちの企んだ離婚計画行為が悪いことである蓋然性よりも上であると思っ
ているかもしれないが、それは誤りであり、前者が後者を上回っている差分はゼロである。

ここに、「人を殺すことは 100%悪いことである」という百科事典的知識が作用する。もちろん「離婚計画は悪いことである」という百科事典的知識も存在するだろうけれども、殺人と並べられたときにこの知識が活性化することはないだろう。

(21) (5)の解釈のために活性化される百科事典的知識：私のした殺人行為が悪いことである蓋然性は 100%である。

(20)に(21)が加えられ、結局、次のような意味が伝達されることになる。

(22) (5)の最終的な意味：私のした殺人行為が悪いことである蓋然性 (=100%) は、君たちの企んだ離婚計画行為が悪いことである蓋然性よりも上であると思っ
ているかもしれないが、それは誤りであり、前者が後者を上回っている差分はゼロである。

これはつまり「君たちの企んだ離婚計画行為が悪いことである蓋然性は 100%」ということである。

このように、先行命題が真であることを前提として後行命題が真であることを新たに導

き出すのが、従来分析されていなかったタイプのクジラ構文の機能なのである。

2.2.5. 二つのタイプを統一的に説明する

この一見全く別の意味に見える二つの意味がどうして同一の形で表現されるのか。この謎をとく鍵は「図地反転」にある。

ゲシュタルト心理学の明らかにしたところによれば、人間は、視覚情報を処理する際に、認知的際立ちを持つ「図」と認知的際立ちを持たない「地」への分化を行う。有名な例は「ルビンの盃」である。



図1 ルビンの盃⁶

図1を二人の顔と見る場合には黒い部分が図となり白い部分が地となる。一方、一つの盃と見る場合には白い部分が図となり、黒い部分が地となる。どちらも十分に可能な見方であり、慣れればその間を自由に行き来することもできる。これが「図地反転」と呼ばれる現象である。このように人間は同一のものを複数通りに捉えることができるのである。

認知言語学は人間の認知能力が言語に反映されている有り様を描き出してきたが、この「図地反転」という認知現象も言語において起こりうることが指摘されている。

- (23) スチューイはブライアンの右にいる。
- (24) ブライアンはスチューイの左にいる。

(23)と(24)は同じ状況を二通りに表現したものである。(23)においてはスチューイーが図となり焦点化されている。ブライアンは地となっており、際立ちのない背景の役割を果たしている。逆に(24)ではブライアンが図となり、スチューイーは地にまわっている。

次に英語の例を挙げる。次の二つの例は、同一の小説から採った *when* の用例であるが、(25)では主節が図、従属節が地になっているのに対して、(26)では主節が地、従属節が図になっていることに注意されたい。

(25) It was dark in the room **when** he woke up. (Paul Auster, *City of Glass*)
目が覚めると部屋は暗かった。 (柴田元幸 (訳) 『ガラスの街』)

(26) Quinn picked up the phone and was about to dial **when** he thought better of it.
(Paul Auster, *City of Glass*)
クインは受話器を取り上げ、いまにもダイヤルしかけたが、そこで思いとどまった。
(柴田元幸 (訳) 『ガラスの街』)

(25)と(26)の *when* の用法は「図地反転」の関係にあると言えよう。

第 2.2.3 節と第 2.2.4 節で見た二つの異なる用法もこれと同様に「図と地の反転」の一種として捉えることが可能である。第 2.2.3 節で見た用法 (e.g., *A whale is no more a fish than a horse (is).*) では、先行命題の真偽が図 (焦点) であるのに対して後行命題の真偽が地 (前提) となっていた。一方、第 2.2.4 節で見た用法 (e.g., *What I did is no worse than what you and your father had planned for me.*) では、先行命題の真偽が地 (前提) となっているのに対して、後行命題の真偽が図 (焦点) となっていた。整理すると次のようになる。

- (27) 「後行命題が偽であるのと同様に先行命題も偽である」タイプ
先行命題の真偽が図 (焦点)
後行命題の真偽が地 (前提)
- (28) 「先行命題が真であるのと同様に後行命題が真である」タイプ
先行命題の真偽が地 (前提)
後行命題の真偽が図 (焦点)

(27)と(28)は比較の前部要素と後部要素の間で図地反転が生じていることになる。このように、クジラ構文の意味が二手に分離することには図地反転という認知的な基盤があるのである。

3. クジラ構文は何に ecological niche を与えられているのか

3.1. 図地反転の関与する比較表現

クジラ構文の従来タイプと非従来タイプの図地反転と極めて似た図地反転が *as well as* に見られる。まず、(29)(30)は従来タイプに相当する。

(29) [...] the nouns chosen must have a “spiritual” quality, must be symbolic **as well as** “real”
[...]

(Helen Vendler, *Dickinson: Selected Poems and Commentaries*)

選ばれた名詞は「霊的な」性質を持っているのであり、「現実のもの」というだけでなく象徴的なものでもあるに違いない。

(2013 年度金曜 1 限『翻訳演習』教師訳例)

(30) [...] you will find me cruel, exacting, dogmatic, brutal, even from your point of view, **as well as** inspiring. The regimen of true eroticism is strenuous.

(John Hawkes, *Virginie: Her Two Lives*)

貴女は私という人間を、靈感の源と思って下さることもあれば、残酷で、容赦ない、独善的で、野蛮な、貴女からご覧になっても常軌を逸した人間だと思われることもあるでしょう。真のエロティシズムに至る道は誠に険しいのです。

(柴田元幸『生半可版 英米小説演習』)

(29)では、*must* の畳み掛けから、*real* が〈前提〉であり *spiritual/symbolic* が〈焦点〉であると考えられる。(30)では *The regimen of true eroticism is strenuous.* と続くことから *inspiring* が〈前提〉であり *cruel, exacting, dogmatic, brutal* が〈焦点〉であると考えられる。

一方、(31)はクジラ構文で言えば非従来タイプに相等する。

(31) In English the word “next” indicates the unit which follows the current unit, “last” indicates the unit which precedes the current unit, the locutions “after next” and “before last” being usable for the calendric units that are two units away, in the past and in the future, from the current one. Thus we have “this week,” “next week,” “week after next,” or “last week,” “week before last.” This pattern holds for weeks, months, years, **as well**, I suppose, **as** less commonly used units such as decades and centuries. (C. J. Fillmore, *Lectures on Deixis*)
英語の *next* という単語は発話時の単位の次にやってくる単位を指し、*last* という単語は発話時の単位の前にやってくる単位を指す。*after next* と *before last* という言い

回しはカレンダー上で発話時の単位から過去・未来に二単位分だけ離れた単位を指すのに使うことができる。それで我々は *this week*、*next week*、*week after next*、*last week*、*week before last* という言い方をするのである。このパターンは *week* や *month*、*year* に適用できるだけでなく、私が思うに、使われる頻度がもっと低い *decade* や *century* といった単位にも適用できる。

二つ目の *as* の後の *less commonly* により、*as well as* の前が〈前提〉で後が〈焦点〉であることが明らかとなっている。

この *as well as* の図地反転はクジラ構文の図地反転と（比較にかかわる構文であるという点でも情報構造の点でも）類似しており、*as well as* はクジラ構文に対して *ecological niche* を与える表現の一つであると考えられる。

3.2. 極端な事例を引き合いに出す表現

クジラ構文は、従来タイプであれ非従来タイプであれ、ある事柄の蓋然性が別の事柄の蓋然性と同じであるということを示す機能を持つ。そしてその引き合いに出された「別の事柄」の蓋然性は、従来タイプの場合には（たとえば馬が魚である蓋然性のように）極端に低いものであり、非従来タイプの場合には（たとえば殺人が悪いことである蓋然性のように）極端に高いものである。このような極端であるものを別の本来極端でないはずのものと同様に並べることによって、本来極端でないはずのものについて何らかの情報を提示する表現が、英語にはクジラ構文以外にも複数存在する。従って、その表現が共謀してクジラ構文に *ecological niche* を与えていると考えるのが妥当であるように思われる。

そのような表現の例として、まず *might as well* の誇張用法を取り上げたい。

(32) 1968! She **might as well** have said 1492; either way, it was ancient history. (COCA)

1968 年って！1492 年と言っても変わらない。いずれにしたって大昔だ。

(33) “You sure you’re ready for this?”

He **might as well** have asked me if the sky is blue.

“I’m sure.”

(COCA)

「本当に準備はいいんだな？」

この質問は、空は青いかと聞くようなものだった。

「本当に OK」

(32)では、「1968 年」があまりに昔のことであることを誇張して言うために、1968

年の古さと（もっと極端に古いはずの）1492年の古さが実質的には変わらないと主張されている。(33)では、「準備ができているかどうか」という質問が、「空が青いかどうか」という極端に無意味な質問と同じ程度の意味しか持たない、つまりそれだけ無意味であるということが述べられている。このように、極端なものと同様に極端でないはずのものを釣り合わせる操作はクジラ構文で見られた操作と類似したものと見なすことができる。

第二に、疑問文が特殊な意味を帯びる次のような例を見てみよう。

(34) Lily: Will Liverpool beat Tranmere Rovers in the FA cup?

George: **Is the Pope a Catholic?**

(Evans and Tyler 2006: 646)

リリー： FAカップ、リバプールはトランメア・ローヴァーズに勝つか？

ジョージ： それ、ローマ法王はカトリックですかって聞くようなもんだぞ。

(35) Columbo: Say, I noticed that he likes country and western music.

Goldie: **Does a bear like honey?**

(Columbo, Episode 9, Blueprint for Murder)

コロambo： ウィリアムソンさんはカントリーとかウェスタンとかがお好きなようですね。

ゴールドディー： それ、熊は蜂蜜が好きかって訊いているようなものよ。

(34)(35)で太字にした疑問文は概略「当たり前のことを言うな [訊くな]」というような内容を意味する特殊な用法で用いられている。「ローマ法王はカトリックである」という命題や「熊は蜂蜜を好む」という命題は真であることが極端に自明である命題である。これと同じくらい、相手が持ちだした命題（リバプールがトランメア・ローヴァーズに勝つという命題、ウィリアムソンがカントリーやウェスタンを好むという命題）の方も真であることが自明であるような命題だ、ということを主張しているのである。ここでも極端なものと本来極端でないはずのものとの釣り合わせが行われている。

さらに、次に示したように有名人の名前を持ち出す場合も同様に分析できる。

(36) Ted's Friend: You're a fuckin' liar. Do you expect us to believe that you're going to the prom with Mary?

Ted: What's so crazy about that?

Ted's Friend: Oh, yeah, dirt bud, and **I'm going with Cyndi Lauper.**

(There's Something about Mary)

テッドの友人： この嘘つきめ。お前がメリーとプロムに行くなんて話、信じると

思うか。

テッド： そんなに騒ぐことじゃないだろ。

テッドの友人： ああ、そうだよな、俺だってシンディー・ローパーと行くわけだしな。

(37) Driver: Those things are for cops, you know.

Columbo: Yeah. Well, I'm a cop.

Driver: Oh, you're a cop. **I'm Arnold Schwarzenegger.**

(Columbo, Episode 54, Uneasy Lies the Crown)

運転手： そうなのってお巡りさんが使うもんなんじゃないのかい。

コロombo： ああそうさ。僕、お巡りさんだから。

運転手： ほう、お巡りさんかい。ほいじゃ俺はアーノルド・シュワルツネッガーってとこか。

(36)では、「冴えない Ted が人気者転校生の Mary とプロムに行く」という、偽であることがそこまで極端に明確ではない命題と、「ただの高校生の自分がシンディー・ローパーとプロムに行く」という、極端に偽であることが明確である命題が並び立てられることにより、「Ted が Mary とプロムに行く」という命題も偽であるということが冗談めかして表現されている。(37)も同様である。「あんたみたいな人がお巡りさんだなんて、俺がシュワルツネッガーだってことと同じくらいあり得ないことだね」ということである。運転手がシュワルツネッガーであるという命題は、偽であることが極端に自明の命題であるが、一方みすぼらしい格好をしたコロomboのような人間がお巡りさんであるという命題は真偽が揺れ動き得る命題である。ここでもまた、極端なものとは本来極端でないはずのものの釣り合わせが行われている。

次に、「それはあり得ないでしょう」と相手の発言を否定するのに用いられる *pigs might fly* という表現を取り上げる。

(38) 'With a bit of luck, we'll be finished by the end of the year.' 'Yes, and **pigs might fly!**'

(OALD 第8版)

「うまくいけば今年の終わりには終わっているかもな」「そうだな、豚が空を飛ぶのと同じくらいの可能性ならあるかもな！」

(39) 'There's a chance he won't get involved in this, of course.' 'And **pigs might fly.**' (COB)

「彼がこれに関わらない可能性もあるよな、もちろん」「豚が空を飛ぶのと同じくらいの可能性ならね」

この pigs might fly という表現を用いる話し手は、聞き手の持ちだした命題（「今年の終わりには終わっている」という命題、「彼がこれに関わらない」という命題）が真である可能性を Yes や Yeah、and などですぐは「あり得る」と認める。その上で、pigs might fly によって「それがあり得る世界は、豚が空を飛ぶ可能性すらあり得ると認められるような世界である」ということを指摘する。豚が空を飛ぶという命題は、偽であることが極端に自明であるような命題である。それを might で「あり得る」と認めることによって、Yes や Yeah、and などですぐは「真であり得る」と認めたはずの先行命題の方まで偽の側に引き寄せる。これが pigs might fly のメカニズムである。極端に偽である命題を引き合いに出すことによって、真偽が揺れ動く命題についても偽であると断定していることになるのである。

このように、真偽が極端に自明であるような命題とそうでない命題を並べることによって、修辭的な効果を伴いつつ後者の命題の真偽を主張する表現が、クジラ構文以外に様々な存在するのである。これらが共謀してクジラ構文に ecological niche を与えているものと考えられる。

4. 結語

本稿はクジラ構文が表す二つの意味が一つの意味構造で統一的に説明しうることを指摘した。そして、その意味構造が英語話者にとって自然なものであると感じられるのは、英語の体系の内部にこれと類似した構図を持つ表現が複数存在し、それらが共謀してクジラ構文に ecological niche を与えているからであるということをも主張した。

注

* 私は、授業の受講生だった時期とティーチング・アシスタントとして働かせて頂いた時期を合わせて約7年、柴田元幸先生のお世話になった。しかし、自分の専門は英語学。現代文芸論に所属しているわけでもなければ文学の研究者でもない。にもかかわらず『れにくさ』柴田先生御退職記念号への論文寄稿の機会を頂けたことは、光栄・感激という他ない。お声を掛けて下さった日にちまで覚えてしまったくらいだ。

本稿は平沢(2012)の理論的枠組と例文に大幅な改訂を加えたものである。特に例文に関しては、読者の方々に柴田先生の翻訳を楽しんで頂けるよう、その選定と提示方法に工夫を施した。その点にあまりに時間をかけすぎて、「内容そっちのけ」のラインすれすれの所を爪先立ちで歩いた感があるが、これほどまでに執筆それ自体から快樂が得られたのは初めてである。この愉しみと喜びが、筆者を乗り越えて多くの読者——他の誰より柴田先生——のところまで、染み渡っていきますよう

に。

¹ 「先行節」は *than* よりも前の部分から *no more* を除いた部分によって表される節、「後行節」は *than* よりも後の部分によって表される節のこととする。

² *no more than* 〈数値〉は他に「...を超えていない」「...以下である」の意味でも用いられる。たとえば試験で *Answer this question in no more than 100 words.* のような問題文が使われることがよくあるが、「たったの 100 語で答えなさい」では明らかにおかしい。もちろん「100 語以内で答えなさい」の意である。さらに、「たったの...」で解釈されても「...以下である」で解釈されても問題ないような場面で *no more than* が使われる場合もある。たとえば次の三つの文を見比べて頂きたい。

- e.g. 身長 1 メートル 60 センチしかないやせっぽちの片桐は、その堂々とした外観に圧倒されてしまった。
(村上春樹「かえるくん、東京を救う」)
- e.g. A skinny little man **no more than** five-foot-three, Katagiri was overwhelmed by the frog's imposing bulk.
(Jay Rubin, "Super-Frog Saves Tokyo")
- e.g. 160 にも満たない、痩せた小男の片桐は、その堂々たる体格に圧倒されてしまった。
(柴田元幸『翻訳教室』)

村上の原文で「しかない」となっている部分が Jay Rubin 訳では *no more than* で表現されている。そして、Rubin 訳から柴田によって重訳されたものを見ると「にも満たない」と訳されている。ここで重要なのは、文脈上フォーカスされているのが片桐の身体の小ささであるために、柴田訳を村上の原文と比べてみても「意味が大きく変わってしまっている」という印象を受けない点である。

no more than の二つの意味のせめぎ合いや、そこに *not more than* がどう関わってくるのかという問題については稿を改めて論じたい。

³ 言語学の多くの分野において、話者同士の間で共有されている知識のうち言葉の意味に関する知識は辞書の知識と呼ばれ、それ以外の事柄（文化・社会など）に関する知識は百科事典的知識と呼ばれている。ただしこの二つの知識がどのような関係にあるのかという点については研究者によって見解がわかれている。

⁴ *a horse is* の部分が肯定の形を取っているのは「馬が魚である」と断定しているからではなく「馬が魚である程度」のような意味で〈尺度化〉しているからである。これを理解することが、このタイプのクジラ構文を理解する際に重要になる。このような〈尺度化〉は *as ... as ...* の同等比較構文においても時折みられる。

- e.g. I liked him **as much as** Churchill liked Hitler. (安藤 2005: 578)
私が彼を好きではなかったのはチャーチルがヒトラーを好きではなかったのと同じだ。

管見の限りでは、このような〈尺度化〉に基づく表現は日本語では慣習化されていない。ただし、次のようにユーモアを込めて使われることはあるようだ。

- e.g. 石原良純：ま、あの、天気も当たりますけど、これ（＝クイズ）も当てますよ。はい。
上田晋也：おお、ってことは、ほとんど当たらないと考えてもいいで...
石原良純：おい！

(フジテレビ『ペケボン新春 3 時間 SP』2013 年 1 月 4 日放送分)

司会の上田晋也は、石原良純の一つ目の発話を「天気を当てる確率とクイズを当てる確率が同程度」と解釈し、そこに「石原良純の天気予報はほとんど当たらない」という百科事典的知識（これが日本人の間でどの程度まで共有されている知識であるかは本稿の論じるところではない）を加えることによって、「クイズもほとんど当たらない」という結論を導き出している。これはまさに〈尺度化〉のプロセスを経て初めて達成される論理展開である。この上田晋也の発言の後に観客から笑いが沸き起こったが、これは結論が面白いから笑ったというだけではなく、〈尺度化〉の物珍しさも関わっているに違いない。（「まるでクジラ構文のようだ」という理由で笑ったのは筆者だけだろうか）

も。)

⁵ no better than ... 「...も同然だ」はこのタイプのクジラ構文が熟語化したものと考えられる。

e.g. The chief that I complain of is his impenetrable mystery, which is **no better than** nonsense, if it conceal anything good, and much worse, in the contrary case.

(Nathaniel Hawthorne, “Monsieur du Miroir”)

私は何よりもまず訴えたいのは、氏のその測り知れぬ不可解ぶりであり、もしそこに何か善なるものが隠れているとすればそれは無意味な不可解さだというほかなく、逆に邪なるものが隠れているとすれば話はさらにずっとまずいことになるのである。

(柴田元幸『生半可版 英米小説演習』)

⁶ Rubin (1921)の指摘した現象である。本稿の図は立命館大学の北岡明佳教授が作成したもので、許可を頂いて掲載している。

参考文献

安藤貞雄『現代英文法講義』開拓社、2005年。

Davies, Mark. *The Corpus of Contemporary American English: 450+million words, 1990-present.* (<http://www.americancorpus.org>), 2008-.

Evans, Vyvyan and Melanie Green. *Cognitive Linguistics: An Introduction.* Edinburgh: Edinburgh University Press, 2006.

平沢慎也『『クジラ構文』の『構文』としての意味はどこにあるのか』『英語語法文法研究』(第19号)、2012年、50-65頁。

Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech, and J. Svartvik. *A Comprehensive Grammar of the English Language.* Harlow: Longman, 1985.

Rubin, Edgar. *Visuell Wahrgenommene Figuren : Studien in psychologischer Analyse.* Kobenhaven: Gyldendalske boghandel, 1921.

Taylor, John R. “The Ecology of Constructions,” In *Studies in Linguistic Motivation.* Günter Radden and Klaus-Uwe Panther (eds.). Berlin: Mouton, 2004, 49-73.

Why does the *no more* construction sound natural to native speakers of English?

HIRASAWA Shinya

The *no more* construction (e.g., (1) *A whale is **no more** a fish **than** a horse is.*, (2) *Nuclear weapons are **no more** a threat to the world **than** an epidemic of bacteria spreading.*) challenges the shared assumption that the first proposition is more likely to be true than the second one, asserting that they are no different in the probability of being true. In (1), the second proposition is obviously false, leading one to conclude that the first proposition is also false. What is happening here may be dubbed *regressive reading* from the second to first proposition. In (2), by contrast, the first proposition is obviously true, leading one to conclude that the second proposition is also true. This is a case of *progressive reading* from the first to second proposition.

The alternation between the regressive and progressive readings has a cognitive basis: a figure-ground reversal. The obviously true/false proposition corresponds to the ground, and the other one to the figure. A strikingly similar linguistic figure-ground reversal is observed for the *as well as* construction.

In the *no more* construction, the proposition that is not obviously true/false is declared to be true/false by way of comparison with the other, obviously true/false proposition. In fact, argumentation like this, based on the juxtaposition of an extreme instance and a non-extreme one, is also employed in many other expressions such as (3) *If you talk to Susan, you might as well talk to a brick wall*, (4) *Is the Pope a catholic?*, (5) *If you're a cop, then I'm Arnold Schwarzenegger*, and (6) *Yeah, and pigs might fly*.

A picture thus emerges of the *no more* construction sitting comfortably in the system of English, a number of other expressions sharing some linguistic properties with it. It is as if they conspire to create an *ecological niche* for the construction.